
ラストシークエンス[夏の花とカフェ・テラス]

いかれ帽子屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストシークエンス「夏の花とカフェ・テラス」

【Nコード】

N6413V

【作者名】

いかれ帽子屋

【あらすじ】

本来いる筈の無い女性が描き加えられたゴッホの『夜のカフェ・テラス』の贋作をめぐり、各年代ごとに奔走する登場人物。当たり屋の葛西、二番目の男桑原、絵を盗み出す姉弟、売れない絵描きの木嶋有明。偽物の家族と暮らす少女は言った「本物より価値のある偽物がきつとある」。すべては〈最後の光景〉、夏の花とカフェ・テラスに向けて

シーン？／十年前

【シーン1／十年前】

葛西は落胆していた。保証人を引き受けた直後に友人が行方をくらませ、多額の借金が彼の手元に残った。

何かに迷ったときはコイントスで決めてきた。印鑑を押すのもそれで決めていたら、結果は違ったかも知れないと思うとやるせない。ジンクスを破ったことは、かつて一度しかなかった。

「冗談じゃねえ」

気がかりなのは傍らにある絵のことだ。

私立図書館に隣接した公園の錆び付いたベンチに腰かけ、百円硬貨を親指に乗せて上向きに弾く。回転しながら宙を舞い、落ちてきたら受け止めて、また放り上げる。

年端もいかない少女に声をかけられた。

「浮かない顔してるね、おじさん」

「援助交際なら他をあたれ。借金で首が回らねえんだよ」

うつとうしく思っ、硬貨をポケットにしまい邪険に追い払う。けれど彼女は立ち去ろうとせず、額縁に入った絵に視線をそそぐ。

「ゴッホの『夜のカフェ・テラス』でしょ。レプリカでも売れば少しは足しになるんじゃないの？」

「贋作なんて誰も買いやしねえよ」

一蹴こそしたが、即座に作者と題名を言い当てた少女をすこし見直した。葛西は最前列のテーブルに描かれた、青いイヤリングの女性を指差す。彼女の着る白いドレスは闇夜によく映えた。

「この女は本物の方にはいないんだ。そんな中途半端なレプリカに買い手がつくかよ」

「いない筈の女性を書き加えられた贋作、か」

少女は感慨深そうに口にした。葛西の隣に腰かけると彼女は脚を投げ出す。

「わたし今さ、偽物の家族と暮らしてるの」

事情はわからないが、何かを背負っているのだろう。冬の風が身に沁みる。葛西はぶるっと体を震わせて、体を抱き込むように縮こまった。

「良い人たちよ、とても。本当の家族だったらと思うときがあるくらい。だから思うの。本物より価値のある偽物が、きっとあるって」「この絵は売りたいくねえんだよ」

つい本心が出た。彼女の言葉が琴線に触れたのかもしれない。どうして？ と尋ねられて葛西は呟いた。

「俺の勲章だから。でもいつ差し押さえられるかもわからねえ。どうすりゃ良いんだよ」

取り乱しかけたが、大人げないと自制する。けれど勢い余ったとは言え、吐露した言葉は紛れもなく本音だ。誇れることなんて何もない彼にとって絵は特別な価値を持っていた。

絵の処遇をコイントスなどでは決められない。

「なら寄贈したらいいじゃない。例えば、図書館とかに。そしたらいつでも見に来れるわ」

気分が高揚し、少女の手を取って握りしめた。胸のつかえがとれたのだ。葛西は叫ばずにはいられなかった。

「でかしたぞ嬢ちゃん」

「元気になったみたいで良かった。さっきまで思いつめた顔してたから、変な気でも起こすんじゃないかと思ったもの」

「自殺なんかしねえよ。怖くてアクセルなんて踏み込めやしねえ」

ポケットから硬貨を取り出す。西日を受け、鈍く光った。

「何か暖かいものでも飲むか？」

「ジュースの代金分を体で払ってあげようか」

「こういうときは素直におごられておくもんだぜ？」

自販機へ向けて歩き出す前に葛西は振り返る。はじめて視線を交わした。

「嬢ちゃん、名前はなんて言うんだ？」

彼女は短く名乗った、野中奏と。

シーン？／現代

【シーン2／現代】

初夏の陽射しが色濃い影を落としている。

桑原修治は額の汗をぬぐう。私立図書館の閉館に従い、蔵書を詰め込んだ段ボールを運び出し、トラックに延々と積んでいく作業に人手が足りないと臨時で駆り出された。真夏に引っ越しのアルバイトを入れたことを後悔したが、新しいベースを買うためなのだと奮起する。

「慎重に運べよ」

そう言って先輩に、他の段ボールとは異なる平たい包みを手渡された。高価なものなのかも知れないと思い畏縮する。全身の毛穴から飲んだ以上の水分が噴き出しているように思えた。

「最終日にひまわり屋敷に持っていくものだから、まだ車には載せないでくれ」

聞き慣れない名前にさらに困惑する。敷地を埋め尽くす一面のひまわり畑を想像する。

「なんですか、それ」

「ゴッホの『ひまわり』って有名な絵があるだろう。その贋作を高値で買い集めてるじいさんがいるんだよ。家中が『ひまわり』だらけなんだ」

もの好きな人がいるものだと思えば桑原は肩をすくめる。偽物とわかった途端、急に心が軽くなった。流石にぞんざいに扱うようなことはしなかったが、どんな絵なのか無性に気になる。先輩の目の届かないところで悪いとは思いつつ、紐解いた。

贋作なのだろうが、妖しい魅力が絵にはある。描かれていたのは異国情緒あふれる街角のカフェ・テラスだった。青い夜空には星のまたたきが花咲くように表現されている。奥行きのある暗い路地に目を移せば引き込まれるような錯覚を抱いた。

二台には積まないで、ひとまず助手席に置く。それから建物の裏の林で煙草を吸い、一息吐いた。

子供の話し声がある。お姉ちゃんと言ってるのが聞き取れた。しばらくして、絵が入った段ボールを胸に抱えた小学生くらいの女の子と男の子が脇目も振らずに駆けてくる。桑原には気付いていないようだ。

木立から飛び出してきた桑原に子供たちは短い悲鳴をあげる。

「どんな理由があるかは知らないけど、それは流石にまずいって」けれど女の子は包みをいつそう深く抱え込み、桑原を睨み付けた。男の子の方は弱腰で返すように言っているが「裕太は黙ってて」と叱責されて肩を落とした。

依然として強い口調で彼女は言う。

「ちょっと借りるだけよ」

返す気はさらさらなようだ。裕太にかぎっては、とつくに涙ぐんでいる。

「そのちよつとだけの所為で俺は首をはねられるかも知れないんだぞ」

「おにいさん殺されるの？」

「いや、殺されはしないだろうけどさ」

「なら良いじゃない。女々しい奴ね」

「何ひとつ良くねえよ」

風で枝が揺さぶられ、地面に落ちた木陰は絶えずその形を変える。汗が冷えて、身震いした。

「なんで絵を盗むんだよ」

あんたには関係ないでしょと言い切るより先に、裕太が「入院してるおばあちゃんがこの絵を好きだから、まだ見せてあげたらきつと元気になると思ったんだ」と言っただけで女の子にまたどやされた。

「だからって盗むのはよくないだろ」

「この絵じゃなきゃ駄目なのよ」

女の子までうつむいて泣き出す始末。埒が明かず、どちらが悪い

のかわからなくなってきた。「仕方ねえな」

「さっさと婆さんに見せて、明後日の昼までには必ず返しに來い」

「男と男の約束？」

「そういうことにしといてやるから」

きつと最近覚えた言葉なんだろうと思うと微笑ましかった。女の子が頬を入念にこすってから顔をあげる。

「あんたよく見たらいい男ね」

嘘泣きかよ。精一杯、シニカルに笑って桑原は言った。

「十年経ったら会いにおいで。今度は本当に泣かせてやるよ」

蝉の声に混じって自分を呼ぶのが聞こえてきた。彼は喉を潤す。

大声で返事をして、持ち場に帰って行った。

シーン？／三十年前 1

【シーン3／三十年前】

車道際に立ち、ポケットから百円玉を取り出す。商売道具は健康な体と一枚の硬貨だけだった。コイントス。左手の甲に落ちて来たところを右手で覆い隠すように素早くキャッチする。表を向いていた。

葛西は左折してきた自動車の前に躍り出た。体がボンネットに乗り上げる。急ブレーキは間に合わず、ガラスに叩きつけられて歩道に崩れ落ちた。車体には大きな凹みが残された。

起き上がると覚束ない足取りでドアを開け、助手席側から乗りまだ放心している運転手の胸倉を掴む。あくまで車内で交渉を済ませ、半ば脅すようにして示談金を巻き上げた。

裏が出るまでそうして日銭を稼ぐ。一台目で裏が出ようとも欲を出さずにルールに従った。例外はない。破ったらどうなるか、と仲間一人に聞かれた。しばらく考えてから葛西は「そのときは、死ぬかもな」と冗談半分で笑う。落ちぶれたものだという自嘲を含んでいた。

「本当にコイン、さまさまだよ」

波が碎ける音がする。沿岸部の工場地帯にいた。稼業を切り上げてから、居酒屋で飲んでいたことを思い出す。慌てて紙幣の所在を確かめた。ポケットに札束が無造作に突っ込まれていてひとまず安堵する。

幼いころの夢を見ていた。父親にさんざん殴られて家を追い出されるまでの記憶の再現。寝汗で肌張り付いた布地が冷えて気持ち悪い。

しばらく夜風にあたって酔いを覚まそうと思い、波止場を海岸線に沿ってぶらつく。

そろそろ帰るか。両側に倉庫が建ち並ぶ大通りに入った。電灯は

消えていて暗く、たびたび貝殻を踏んだ。倉庫を二つ過ぎたところで歩くのも億劫になり、寄りかかるとシャッターは大きく波打った。低いエンジン音が聞こえる。車内灯の点いたワゴン車が停まっていた。うまく働かない頭でも、あの車の前には飛び出せないと判断できた。轢かれた際に衝撃を緩和するために体をボンネットの上で転がらせる必要があり、ワゴン車ではそれができない。

潮騒を子守歌にもう一眠りしようかと目をつぶったとき、ワゴン車が猛スピードでバックした。何事かと思い、見やる。車内灯は消え、暴れ馬の荒い鼻息を思わせる過剰なエンジンの回転音が響き渡る。

空き缶や貝殻を車輪が踏み砕く音が次第に大きくなっていく。速度を上げながら近付いて来ているようだ。葛西の後ろには海原が広がっている。

「冗談じゃねえ」

逃げるか、止めるか。

「本当に、冗談じゃねえ」

裏側が出たから景気良く酒を飲んだ。今日の仕事はそれでしまいなんだよと毒づく。自動車の進路に飛び出した葛西はポケットのよれた札束にライターで火を点ける。燃え上がった紙幣を夜空にばらまいた。ライトが灯り、まばゆくて目が眩んだ。何も見えない。

立ちふさがる。死んだな、と思った。

シーン？／三十年前、2

聞き馴染みのある急ブレーキをかける音がした。運転手がハンドルを切り、自動車の進路は大きくそれて倉庫に突っ込んだ。シャッターを破る、雷のような音が耳をつんざく。

車内灯が点いた。運転していたのは父親くらいの年代の男性だった。頭から血を流しているが、葛西を見据えている。後部座席から縦長の包みを抱えた少年と母親らしい女性が降りてきた。一家心中という言葉が脳裏をよぎり、噛み違えた奥歯が鈍い音を立てる。

運転席のドアをこじ開けると躊躇なく男性を引きずり出した。「私だって本当はこんなこと、したくはなかったんだ」と彼は叫んだ。悪戯を咎められた子供のような言い分だと思った。「したくてする奴がいるなら俺の前に連れて来い。殺してやる」。顔面を殴りつけて地面に倒れたところを馬乗りになる。

小刻みに震えながら、男性は振り絞るようにいきさつを話した。

自暴自棄なのか、事業に失敗して借金を背負ったくだりから語調が強まる。

まるで正当性を主張するように彼は一息で言い切った。

「最後の頼みの綱で昔、大枚をはたいて買ったゴッホを競売にかけてみれば偽物だとわかって私は良い笑い者だ」

冗談じゃねえと葛西が怒鳴る。子供は葛西がなぜ喚いているのかわからないといった様子で、体の半分を包みの後ろに隠して呆然と眺めている。夫人が男性に憐れむような視線を向けて、息子を抱き寄せる。

「俺は死なねえ。世間に顔向けできなからうが、後ろ指さされようが、嘲り笑われてどんなに惨めでもだ」

胸倉をつかみ男性の体を起こした。

「最後まで生きて死ぬ。それまでは絶対に死んでやらねえ」

葛西は口角から泡を飛ばす。頭に血がのぼり、もう何かを考えて

喋っているわけではない。ただ思うところを片っ端から口にしていた。

「俺は最期に見る光景を決めてる。孫を連れて来たガキと妻に看取られて眼を閉じるんだ。誰もが一度は思い浮かべる普通の幸福を俺は生きてえんだよ」

葛西は我に返る。自分が欲しくてたまらないものを男性が目の前で平然と捨てようとした。それが腹立たしかったのだと気付く。同時に自分の行いを鑑みた。

「今更なに言っただろうな」

ワイシャツに汗とも涙とも付かない滴がこぼれ落ち、男性は困惑した表情を浮かべる。

母親の手を離れた子供が葛西に近寄ってきて、手に抱えた包みを差し出した。

「お父さんが悪いことをしたなら僕が代わりに謝ります。ごめんなさい。大事なもののだけど、これをあげますからお父さんを許してあげてください」

男性が嗚咽をもらす。子供の名前をつぶやきながら「ごめんな」と繰り返す姿はあまりに情けないものに見えた。葛西は包みを受け取る。開いてみるとひまわりの絵だった。くだんの贋作らしい。海から引き上げられたとき、それが恨み言の代わりにでもなると思ったのだろうか。男性を放し、立ち上がる。

子供と同じ目線にしゃがみ、頭を撫でた。

「悪いな坊主。ついカツとなっちゃったんだ」

手に持った額縁が妙に厚く思えて、四力所の留め具を外す。裏板をとると絵がもう一枚出てきた。カフェ・テラスを描いたものだ。葛西は喜び勇んで男性に呼びかけた。

「それも偽物ですよ。数多く描かれた『ひまわり』ならまだしも『夜のカフェ・テラス』が市場に出回るわけがない。手前に描かれている白い服の女性は本物には描かれていないんですよ」
しばらく絵を眺めて決めた。

「こっちを貰ってもいいか。俺の引退記念に」
穏やかなさざ波の往来が聞こえる。
夜が明けようとしていた。

シーン？／現代 1

【シーン4／現代】

「月の裏側には俺たちが失くしたものが還ってくるって言うけれど、」

街角で見かけた、誰からも見向きもされない難破船のようなバンドのヴォーカルは高らかに歌っていた。うち震えるような心臓の鼓動を感じた。

努力しても二番目の男を返上できないことが桑原のコンプレックスだった。なにかにつけて兄と比べられる生活にうんざりしていたとき、兄には無いものを見つけられた気がした。そのときの興奮はいつも心のどこかでくすぶっていて、大学に入ってアルバイトをして貯めた金でギターを買った。爪弾くと値段相応の音がした。

自分で作詞作曲して歌う。はじめは照れくさかったが、すぐに誰も足を止めない現実に向面した。そうなるは今度は、自分が透明になってしまったような寂しさと、蔑視されているという被害妄想に苛まれた。

もうやめようかとさえ思っていたとき、しゃがみ込んで耳を傾けてくれている女の子に気が付く。

牧村詩帆と彼女は名乗る。

「きみ良いね。すごく良いよ」

俺を見てくれた。それだけで喜びが込み上げてきて歌詞がつかえた。

インターネットの掲示板で野田という男性に呼びかけられたメンバーで集まる。彼はわけあって前のバンドをやめたのだという。野田はギターも上手くて声も良い。なによりも人柄で他人を惹きつけた。桑原も例外ではない。

居酒屋で初めて一堂に会したとき彼は、
「宇宙の始まりには大爆発があった」

おもむろにそう言って桑原たちを見回した。

「誰もがそれを信じようとせず、大爆発は大嘘を意味するビッグバンと呼ばれるようになった。今でも宇宙は理論からも知性からも遠ざかっている。俺たちはそれに続く、ちっぽけな星の爆発になろう。岡本太郎は言った。『芸術は、爆発だ』」

バンド名はリトル・スパーノヴァに決まる。野田がヴォーカルになった。彼と詩帆が仲良くしているのを見ると叫びだしたような衝動にかられたが、桑原にはそれさえ封じられていた。それは野田への嫉妬でしかなく、バンドの調和を見出すわけにもいかない。なにより、そんな自分が格好悪くて衝動を内に秘めておくようになった。痛めつけられる弦だけが、桑原の思いを知っている。

八月の末にあるミュージックフェスタに向けての練習が始まる。夏祭りの企画の一環だった。目標が定まったことでメンバーの志気も高まる。桑原はアルバイトをして新しくベースを買った。

メンバー最年長でドラムスを担当する降谷隆道は桑原の良き相談相手だった。

「一步踏み込むか、踏み込まないかで受ける印象がだいぶ違って見える。お前のそういうところが俺は好きなんだ」

「腹を割って話せば誰だってそんなもんすよ」

「ギャップだよ。お前はすごく繊細だ。自分でも気付いてないようだけどな」

降谷のアパートで酒を飲んでいる。頬を赤らめた彼は夜空に冷たく光る満月を仰いだ。

「そう、お前はバズ・オールドリンなんだな」

半ば夢心地で桑原は聞き返す。

「月に二番目に降り立った奴は一番になり損ねた男だった。経歴と身分を盾にされてアームストロング船長に先を譲ったことで得た、月面歩行をした二人目の人類という名誉はオールドリンにとって敗北に他ならなかった」

少し酔いがさめ、グラスを覗き込んだ。頭上の安い電灯の光が酒

の中にたゆたう。

「オルドリンは帰還する前、オリーブの枝を模した金色のブローチを月面に置いてきた。もしかしたら彼は失くしたものを月から取り戻した最初の人間になりたかったのかも知れないな」

喜べよ桑原。今なら一番になれるかも知れないぜ。降谷はそう言うのと雑貨を避けて作ったスペースに横になって寝息を立て始めた。

「強い意志を持って。迫り来る自動車と対峙しても我を通そうとするあの人のような、強い意志をだ」

豪快な寝言だった。流星にそこは逃げておこうぜ。シニカルに笑うと降谷にシーツを被せ、部屋の明かりを落とす。

しばらく息をひそめるように外を眺めていた。ミュージックフェスタの会場となる空き地がアパートから見える。桑原の目には青白く浮かび上がる地面が月面のように映った。

シーン？／現代 2

隣街で花火を打ち上げると聞いた。練習終わりに誘ってはみたものの降谷はキーボードの祐介と居酒屋に呑みに、下戸の野田には先約があるからと言って断られた。

スタジオを出るとき祐介は言った

「桑原さんも誰か誘えば良いじゃないですか」

「たった今、お前らを誘ったつもりだったんだが」

「ぼくら以外で。ほら、詩帆ちゃんとか」

平然と言ってくれるなよと肩をすくめた。言われてから彼女が今日、練習を見にきていないことに気付く。なにかあったのかと心配になった。メールをしたが返信はない。

ひとりで露店をまわる。詩帆にあげようと思い、髪飾りを買った。橋の付近がもっとも込んでいる。往来からはじき出された人々が身を寄せ合うようにして欄干のそばで足をとめる。桑原も端によった。

対岸から打ち上がり、夜空に大輪の花が開く。いくどとなく『芸術は爆発だ』という言葉がちらついた。水面に映る花火を誰と見たいか、そんなことを生まれて初めて考えた。

振り返る。閃光が一瞬、辺りを照らして向かい側の歩道を歩く野田と詩帆の姿を浮かび上がらせた。遅れて花火が弾ける音がする。

先約ってそういうことかとうちひしがれる。人込みが急に息苦しく感じた。花火から逃れるように遠ざかる。髪飾りだなんてとんだところで空回りしていたものだ。桑原は自嘲した。ポケットの中で髪飾りは異様な存在感を持っている。

本番まで二週間を切った馴染みのスタジオを個人で借りて練習するが集中できない。花火大会で見た詩帆と野田のことを引きずっていた。得られる側とそうでない人間は一体、どこでわかれるのだろうか。桑原は自分の立ち位置がわからなくなった。

ステージに向けて設置されたアンプが目にとまる。反響の中にいる演奏者がパートを見失わないように自身が出した音を聴くためのものだ。

ギターケースを抱えた野田が入ってくる。

「祐介の言ったとおりだ。本当にひとりで練習してるんだな」

配線をつなぎ、せっかくだから一緒にやろうと彼は屈託のない笑みを浮かべる。人の気も知らないでと桑原は苦笑いを返した。やっぱりやっぱり野田のことを嫌いになれなかった。

一時間ほど音合わせをしてインターバルをはさむ。

「お前によく似た奴を知ってるよ」

野田がアンプに腰掛ける。彼はポカリスエットを仰いで口元をぬぐう。

「まあ、そいつは矛盾の塊みたいな奴だったけどな。妙に人懐っこいくせに人間嫌いだった。だけど誰よりも人間の力を信じてた」

桑原を後目に野田は続ける。

「あいつを見てると思うよ。この世界には善意も悪意もない。ただ行為だけがあって、あとは誰かが勝手に善悪を判断してるだけなんだって」

図書館から絵を盗み出した姉弟のことが脳裏をよぎる。良かれと思っただけ絵を盗んだ彼らの行為を俺は咎めた。納得はしたが野田の意図が読めない。

「なにが言いたいんだ？」

「やりたいことを、やりたいようにやれってことさ」

詩帆には言っているけど、と野田はもったいぶって言った。彼の口から詩帆の名前が出ただけで、かすかに胸の奥が痛くなる。

「俺が前のバンドをやめた理由は声帯麻痺なんだ。治療でだいぶ良くなったけど喉を使いすぎると突然、声が出なくなる」

「なんでまだ音楽やってんだよ」

「そう思うだろ。仲間にも止められたけど、やっぱり音楽が好きだから。だいたいぶもめて今にいたるわけだ」

おしまい。彼は軽快に言い、アンプを降した。

声帯麻痺はヴォーカルとしては致命的な欠陥だった。けれど野田と詩帆のあいだで秘密の共有がなされていたことの方が、親密さがかがえて桑原には堪えた。

「そんなこと、どうして俺に言うんだよ」

「俺の意地だからだ」

病気を理由にすればヴォーカルの座を奪えるかも知れないが、それではフェアじゃない。純粋な実力で、ひとつでも良いから勝ちたいという気持ちが沸き起こった。

桑原は今までにないくらい野田の存在を強く意識する。

しばらく二人は対峙していた。

シーン？／四十年前

【シーン・5／四十年前】

暇なときは写生をして過ごす。

木嶋有明は井の頭恩賜公園の片隅で、カンバスに向かって黙々と鉛筆を走らせる。芸術家を志して家を出てから、二束三文の絵を売って慎ましく暮らしていた。いつまでこんな生活が続くのだろう。

最初に会ったとき、彼女は似顔絵を描いてほしいと言った。彼女が髪をかき上げると、空を閉じ込めたような青いイヤリングが左右に揺れたのを覚えている。名前を入れるためだと言い、思いきって尋ねた。

佐々木アサがやって来るのを待ち望んでいる自分に気付くまで、そう時間はかからなかった。けれど売れない絵描き風情が手に届く筈もなく、有明はひたすら思いを振り払うかのように絵と向き合う。しかし視線を外そうとするほど意識は頑なに彼女を捉えて離さない。隣で眠る彼女を黙って描いたこともある。傾げられた細い首筋も、腕にたれさがる黒髪のしなやかな曲線も全部が愛おしかった。紙の上でしかそれらは手に入らないと思うといたたまれず、有明は目を覚ます前に絵を幾重もの斜線で塗りつぶした。

本を広げていると、アサが手元を覗き込む。

「それはなに？」

「ボタニカルアートっていう草花の特徴がわかるように正確に描写した絵画なんだ。言うなれば、植物の肖像画かな」

「ゴッホの『ひまわり』も、そうなの」

「鑑賞者に与える情報が違うよ。ボタニカルアートは生態で、『ひまわり』はゴッホの心情を伝える媒介なんだと思う」

これはひまわりではない。アサがボタニカルアートのひまわりを指差す。首を傾げる有明に彼女は得意げに言った。

「インクと紙で出来ているじゃない」

「へ理屈だ」

「哲学って言うのよ」

ゴッホの模写をはじめたのはその頃からだった。生前にたった一枚しか絵が売れなかった彼の姿に自分を重ねていたのかもしれない。細部まで丁寧な真似ることを心掛けた。分析し、技術を盗み、ひたすらカンバスにぶつける。妥協はしなかった。

特に好んだ題材は『夜のカフェ・テラス』だった。

「星がにじんだように描かれているのは、ゴッホが泣きながら見ている光景だからかもしれない」

そうアサが言ったとき、よりいっそうこの絵が好きになった。けれど力量不足もまだ目についた。いつか、完璧なものに仕上げたいと思う。

出来栄えは次第に本物と瓜二つと言っているほど精巧さを増していく。

画商から声をかけられた。カンバスを不意に横切った線をパンで消し、おもわず飲み込んだ。画家を紹介され、彼に師事することになった。『ひまわり』の模写と自身の絵を持ち込む。画商も、また描いたら持ってくるようにと言った。有明は大きくうなづく。

少しずつ生活が潤い始めた。部屋を与えられ、油絵に必要な道具を一通り取り揃えてもらえた。チューブの残量を気にせずに描けるのはありがたいことだった。今まで以上に意欲的に制作に取り組める環境が整う。その代わりアサとは疎遠となっていた。

今なら満足するものが描けるかもしれない。有明は筆をとり、『夜のカフェ・テラス』をふたたび描き始めた。すこし迷ったがテーブル席の一角に青いイヤリングの女性を描きくわえる。アサだった。出来あがったら真っ先に見せに行こう。君は気付くだろうか。彼は完成を急いだ。

何もかもが上手くいく気がした。画廊で有明の模倣した『ひまわり』が本物同然の値段で取引されているのを目の当たりにするまでは。画商と画家を問い詰めた。握らせられた金を、罵声とともに突き返

す。画商に頬を張られた。お前の言うことを誰が信じるものか。彼が怒鳴り、画家は有明を冷たくあしらう。今まで培ってきたものが足元から音を立てて崩れ去っていく。

情けなくて涙も出なかった。どれくらい自分が描いた偽物が出回っているか、わからない。そう思うと罪悪感の詰まった心臓が鉛のようになくなる。

イーゼルだけが部屋の真ん中に虚しく立っていた。絵は一枚も残されていない。『夜のカフェ・テラス』さえもだ。内側から弾けてしまいそうな混乱と、焦燥感に襲われる。

「本物より価値のある偽物があるわけがない！」

絶叫とともに、やり場のない怒りをぶつけるようにカンバスの乗っていないイーゼルの脚を有明は力いっぱい蹴とばした。

覚束ない足取りで、夜の街をさまよう。アサを見かけた。すぎるような思いで人込みをかき分ける。声が出せなかった。彼女が遠ざかる。僕はなにを被害者ぶっているのだろう。そう思うと伸ばした手は沈んでいくように自然と下がっていった。

売られた『ひまわり』の贋作をすべて買い戻す。償う方法をそれしか思いつかなかった。集め終えたそのとき彼女に逢いに行こう。例えば、百年かかったとしても。

アサに背を向け、有明は歩き出した。

シーン？／現代

【シーン・6／現代】

街中に夏祭りを告知するポスターが貼られた。シャボン玉のような円の中に参加するバンドの写真が載っている。リトル・スパーノヴァの名前もあった。

交通規制がかかって道路が混雑していたため、歩いて向かう。会場に近い詩帆と降谷は先に行っていると野田が言った。

住宅街に入る。松葉杖をついた老人とすれ違った。杖が地面をつく間隔が短い。背後で渴いた音がした。老人が横たわっている。三人は駆け寄って老人を起き上がらせた。

「具合が悪いようなら家まで送ろうか？」

裕介が老人の顔を覗き込む。

「その家を今、出てきたところなんだ。送ってくれるってんなら表通りまで頼みてえ」

タクシーを止めて、老人が病院までと言って乗り込もうとする。

しかし何やら運転手ともめ始めた。タクシーは老人を置き去りにして発進する。

「夏祭りで道が渋滞してて病院までまともに行けないんだとよ。冗談じゃねえ」

老人は肩を震わせていた。足をくじいているが別段、体が悪いようには見えない。そもそも急病であれば自力でなくとも、救急車を呼べばいい。ぶしつけとは思いつつ、桑原は理由を尋ねてみた。

「女房が危篤なんだ。因果応報なのかね。ここにきて自動車に仕返しをされた」

くやしいよと老人はちいさく凝り固まっていくように俯いた。すこしだけ思い悩んだ。けれど強い意志を持ってという降谷の言葉が脳裏をよぎり、決心がつく。

「俺がおぶっていく」

「無茶だよ。それに本番はどうするの」

裕介が血相を変えた。なんとか間に合わせる。桑原は強い意志を示した。

「じいさんが今会いたい人は百年先だって会いたいと思える人だろ。それってすげえ羨ましいと思う」

楽器を裕介に渡し、老人に背を向けて腰を屈める。

「俺は重てえぞ」

「運ぶのは得意なんだ。バイトで鍛えたからな」

立ち上がると野田の方を向き、これは俺の意地だと桑原は言った。すると彼は一言、「必ず間に合え」

何も言わずに桑原は駆け出す。走っているさなか、老人は訊いた。

「人生最期に見たい景色はあるか」。ある。桑原ははっきりと答えた。俺もだ、と老人はどこか哀しげに言った。

病院に着いて降谷からの着信に気付き、かけ直す。五回目のコールで電話に出た彼はもったいぶって言った。

『良い知らせと悪い知らせがある』

演奏の順番をラストに回してもらえたことと、野田の声が出なくなったことを告げられる。

控室は本番前の緊張感とは全く異なるもので張りつめている。桑原の身勝手を誰も咎めない。そもそも憔悴しきった顔で俯き、口を開くこともしなかった。

口火を切ったのは降谷だった。

「野田の声が出ないんじゃない仕方ない。今回は辞退しよう」
「詩帆にはなんて？」

「声が出なくなったことは詩帆ちゃんに伝えてあるよ」

裕介の答えを聞いて桑原は彼女を失望させてしまったのではないかと、うなだれる。一夏をかけた努力が水の泡になるのはとても悔しかった。

宣伝チラシを裏返し、野田がペンを走らせる。近寄ってきて桑原に突き出した。

『都合が良すぎることはわかってる。けど頼みたい。お前しかない。おれの代わりに歌ってくれ』

「俺はお前の代わりにはなれない」

野田が肩を掴んだ。痛みを感じるほど十本の指先に力がこもっている。「俺の背中ばかり追うな」。やっとのことでしぼり出したそれは、ひどいものだった。

ふたたびペンをとる。

『お前は二番目なんかじゃない。俺は、お前が歌いたいと思えるそのときまで、ヴォーカルの座を預かっていたに過ぎないんだ。自信を持って』

手が止まった。それから文字は丁寧に綴られていく。

『詩帆はお前を見に来てるんだ』

「詩帆が？」

野田はうなずく。にわかには信じられなかった。桑原はペンを受け取って、なぜ花火のとき一緒にいたんだと書いて見せた。野田が書いているのを固唾を飲んで見守る。

『詩帆に告白した。最高にダサイことに、そのときに声が出なくなつて声帯マヒがばれた』

続けて野田は『そしてふられた。おしまい！』と書いて、ペンを投げだした。

桑原は目を閉じ、はじめて詩帆が声をかけてくれたときのことを思い描いた。彼女が見つ付けてくれたから俺はここにいる。それを確かめて、次はステージに立ったときのことを想像する。観衆の中で彼女の姿を見つけられるだろうか。自分自身に問いかけた。

目を開く。電灯の光さえ、眩く感じられる。

「俺、やっぱり自信ねえよ」

肩を落とした野田は、ペンに手を伸ばして握った。桑原は続ける。「だけど、」

「歌いたい。バズ・オルドリンにさえ出来なかったことを、俺はしたいんだ」

全員が立ち上がり、準備を始めた。誰にも観測されないちっぽけな爆発かもしれない。けれど、叫ぼう。ひとりでも多くのひとに照準を合わせてもらえるように。強い意志を携えて控室のドアを開けた。

「月に置いてきた失くしものを取り返しに行こう」
声を揃えて言う。芸術は、爆発だ。

ラストシークエンス／二ヶ月前

【ラストシークエンス／二ヶ月前】

私立図書館がなくなることが決まった。いつの間にか『夜のカフェ・テラス』の贋作も他人の手に渡り、抗議したものの葛西の言葉が聞き入れられることはなかった。勲章はどこかへ行ってしまった。途方に暮れていた矢先、妻が病に臥した。

ベッドの傍らに座り、葛西は乾いた口調で言う。

「死ぬなんて、聞いてねえよ」

「わたしも言っていない」

彼女はうすら笑いを浮かべていた。

「あなただって、階段から落ちた私を抱きとめて自分が捻挫するなんて知らなかったでしょ？」

彼女がいなくなることを思う。子供はいないが、寂しくはなかった。妻がいたからだ。思い描いていた理想の人生とはだいぶ違ってしまったが悪くない。妻に看取ってもらうというわけにはいかなかったが「これはこれで幸福だよな」。

すぐに一抹の不安を覚えた。妻は、妻はどうだっただろうか。何も伝えられていない気がしてならない。葛西は愛情が理解出来なかった。

ぶっきらぼうながら誕生日を祝い、結婚記念日には欠かさず贈り物を与えた。しかし彼にしてみれば、それらはどこかで見たようなシナリオの模倣に過ぎなかった。ここにきて、自分には色々なものが欠落していると気付かされた。

妻の手を取る。いつの間に彼女の手はこんなに小さくなったのだろうか。握り返す力はあまりに弱々しく、別れが近いことを思い知らされる。妻の骨ばった甲を額に押し当てた。

「お前に愛してるって伝えられる方法は結局、見つからなかったよ」
すると彼女は腑に落ちないというように、不思議そうな顔をした。

「なにを言ってるんですか？」

「あなたは最後まで私を愛してくれていましたよ」

危篤の報せが入り、病院に向かう。背負ってくれた青年に心の底から感謝した。

妻を看取り、夜風にあたろうと外に出る。花火が見えた。人の女房が逝ったっていうのにいい気なもんだ。葛西は煙草に火を付ける。妻と見られたら、どんなに良かったことか。手元でなんとも安っぽい火花が夜闇に散った。

中庭のテーブルに老婆が腰掛けている。手には画用紙を持っていた。白髪のお婆を気にかけて、歩み寄った。

大輪の花火が夜空に咲く。クレヨンで描かれた抽象画のような落書きを覗き込んで、葛西の胸はうち震えた。誇れるような人生ではなかったが、生きていればこんな褒美があるものかと。

今なら星もにじんで見えそうだ。

「良い。絵だ」

「ええ。孫が描いてくれたんです。子供ってよく見ているものですね。私が図書館で熱心に眺めていたのは、本物の方ではないと気付いていたみたい」

遅れてきた花火の音と共に沸き起こる歓声が聞こえたような気がした。かすかに火薬の匂いを孕んだ風が吹き抜ける。

老婆の耳に青いイヤリングが揺れていた。

【了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6413v/>

ラストシークエンス[夏の花とカフェ・テラス]

2011年8月15日03時11分発行